

## &lt; 論 説 &gt;

## Ausbeutung, Exploitation, 搾取

—「剰余価値の搾取」は何を意味しているか—

山 口 拓 美

## はじめに

本稿では、Ausbeutung と Exploitation と「搾取」の意味内容の違いについて考察し、「剰余価値の搾取」という語句が本来何を意味していたのかを究明する。また、Ausbeutung と Exploitation のより適切な邦訳語についても検討する。

## 1. Ausbeutung と Exploitation

日本のマルクス経済学で用いられている「搾取」という用語は、ドイツ語の Ausbeutung と Exploitation に対応する訳語の1つである。『資本論』では、この2つのドイツ語が次のような文の中で頻繁に使用されている。

## 例文 1)

“Obgleich exakter Ausdruck für den Exploitationsgrad der Arbeitskraft, ist die Rate des Mehrwerts kein Ausdruck für die absolute Größe der Exploitation.” (MEW, Bd. 23, S. 232) <sup>1</sup>

「剰余価値率は、労働力の搾取度の正確な表現であるとはいえ、搾取の絶対的な大きさの表現では決していない。」(資本論翻訳委員会訳、第1巻、370頁) <sup>2</sup>

## 例文 2)

“Wie die Bereicherung der Fabrikanten mit der intensivren Ausbeutung der Arbeitskraft zunahm, beweist schon der eine Umstand,” (MEW, Bd. 23, S. 438)

「労働力の搾取の強化につれて工場主たちの富がどれほど増大したかは、すでに次の事態が証明する。」(委員会訳、第1巻、716頁)

このドイツ語原文は、1962年に旧東ドイツで出版されたヴェルケ版からのものであるが、このように、マルクスの『資本論』では、似たような意味を持つ Ausbeutung と Exploitation という2つの用語が用いられており、邦訳ではこれらに「搾取」という同一の訳語があてられている。上記の例文1) および2) を見る限り、Ausbeutung と Exploitation は同一の意味で用いられていると考えて間違いないように思われる。しかし、Ausbeutung が元来のドイツ語であるのに対して、Exploitation はフランス語からの借用語である。これらは、それぞれ異なった来歴を持つ単

語であるのであるから、この2つの単語の間に若干の意味のズレがあってもおかしくはない。すなわち、例文1) 2) のように意味が重なる部分があるとしても、その一方で重ならない部分があることが考えられる。その際、仮に *Ausbeutung* と *Exploitation* との間に意味のズレがあるとすれば、マルクスが *Ausbeutung* だけでなく *Exploitation* をも用いたことには、何らかの意図があった可能性も出てくる。『資本論』では、マルクスは多くの場合 *Exploitation* を用いており、とりわけ上記の例文1) のように第1巻第7章で「労働力の搾取度」を定義する際には専ら *Exploitation* を用いている。この事実は、次のような可能性があることを示している。すなわち、『資本論』第1巻第7章のように純学術的な概念規定の場面ではフランス語由来の *Exploitation* を採用し、それ以外の部分では馴染みやすい *Ausbeutung* をも用いた、というのがそれである。

それでは、*Ausbeutung* と *Exploitation* との間には、実際に何らかの意味のズレがあるのだろうか。この点で最も参考になるのは、1872年から1875年にかけて出版されたフランス語ラシャトル版『資本論』第1巻である。いうまでもなくこのフランス語版は、マルクス自身が校閲し、ドイツ語原本とは別の科学的価値を持つと記したところのマルクス版『資本論』最終版である。マルクスは *Exploitation* をフランス語と意識して用いていたから<sup>3</sup>、このフランス語版で *Ausbeutung* がすべて *exploitation* と訳されているとすれば、『資本論』第1巻では *Ausbeutung* と *Exploitation* とが完全に置き換え可能なものとして用いられていると判断してよいと考えられる。すなわち、『資本論』で用いられている *Ausbeutung* と *Exploitation* との間には意味のズレはないということになる。では、実際のところはどうなっているのだろうか。

『資本論』第1巻のドイツ語ヴェルケ版とフランス語版<sup>4</sup>とを比べてみると、ほとんどの箇所では *Ausbeutung* は *exploitation* となっているが、そうでない箇所も幾つかあることが分かる<sup>5</sup>。次の例文3) は、*Ausbeutung* が *exploitation* とはなっていない箇所の1つであるが、この文は、*Ausbeutung* と *Exploitation* との間の意味のズレを示すかもしれない顕著な事例であるだけでなく、*Exploitation* 概念の理解に対しても重要な手掛りを提供するものである。

#### 例文3)

“Mit verlängertem Arbeitstag dehnt sich die Stufenleiter der Produktion, während der in Maschinerie und Baulichkeiten ausgelegte Kapitalteil unverändert bleibt. Nicht nur der Mehrwert wächst daher, sondern die zur Ausbeutung desselben notwendigen Auslagen nehmen ab.” (MEW, Bd. 23, S. 427)

“Mais la prolongation de la journée permet d’agrandir l’échelle de la production sans augmenter la portion de capital fixée en bâtiments et en machines. Non-seulement donc la plus-value augmente, mais les dépenses nécessaires pour l’obtenir diminuent.” (MEGA, II. Abt., Bd. 7, S. 347)

“The lengthening of the working day, on the other hand, allows of production on an extended scale without any alteration in the amount of capital laid out on machinery and buildings. Not only is there, therefore, an increase of surplus-value, but the outlay necessary to obtain it dimin-

ishes.”(MEGA, II. Abt., Bd. 9, S. 353 f.)<sup>6</sup>

「労働日を延長すれば、機械と建物に支出される資本部分是不変のままでも、生産の規模は拡大される。それゆえ、剰余価値が増大するだけでなく、剰余価値の搾取に必要な諸支出が減少する。」(委員会訳、第1巻、698頁)

このように、マルクスが校閲したフランス語版では *Ausbeutung* の部分が *exploitation* とはなっておらず、*obtenir* となっている。フランス語版の訳者は、この文脈の中で *exploitation* を用いることは不適當であると判断したのである。そしてこの判断は、マルクス自身によって是認された形になっている。また、エンゲルスが編集した1887年の英語版でも *Ausbeutung* は *exploitation* とは訳されておらず、上記のように *obtain* と訳されている。英語版の訳者もフランス語版の訳者と同じような判断をし、それがエンゲルスによって是認された形になっている。こうしたことは、*Ausbeutung* と *Exploitation* との間に意味のズレがあることを示しているように思われる。

しかし、ここですぐに想起されなければならないのは、フランス語ラシャトル版『資本論』の底本となったのは、ヴェルケ版の原本である1890年出版の『資本論』第1巻第4版ではなく、マルクス自身が1872年から1873年に刊行した『資本論』第1巻ドイツ語第2版であるという、自明の事実である。それでは、問題の箇所は、この第2版ではどのようなになっていたのであろうか。次に、第2版の当該箇所を掲げる。

“Mit verlängertem Arbeitstag dehnt sich die Stufenleiter der Produktion, während der in Maschinerie und Baulichkeiten ausgelegte Kapitaltheil unverändert bleibt. Nicht nur der Mehrwerth wächst daher, sondern die zur Erbeutung desselben nothwendigen Auslagen nehmen ab.”(MEGA, II. Abt., Bd. 6, S. 394)<sup>7</sup>

見られるように、ここでマルクスは *Ausbeutung* ではなく *Erbeutung* を使用している。当該箇所は、1867年出版の『資本論』第1巻ドイツ語初版でも同じように *Erbeutung* となっている<sup>8</sup>。つまり、マルクスはこの文脈で *Ausbeutung* を用いたことは一度もないのである。ところが、マルクスの死後1883年に出版されたエンゲルス編集の『資本論』第1巻ドイツ語第3版では、*Erbeutung* が *Ausbeutung* に置き換えられている<sup>9</sup>。そしてこの置き換えは、ドイツ語第4版でも維持されている<sup>10</sup>。ヴェルケ版は、現在でも最も入手しやすいドイツ語版『資本論』であるが、第3版での *Erbeutung* の *Ausbeutung* への置き換えが、この版にも受け継がれているわけである。

さて、問題の箇所が *Ausbeutung* ではなく *Erbeutung* であったのであれば、ラシャトル版の翻訳者は、何のためらいもなくこれを *obtenir* と訳すことができたはずである。というのは、*Erbeutung* という語は、まさにそういう意味を持っているからである。また、*Ausbeutung* と *Exploitation* の意味のズレを最も顕著に示す例文3)の中の *Ausbeutung* が<sup>8</sup>、実は *Erbeutung* であって、第3版以降で *Ausbeutung* とされたのは何かのミスであったとすれば、この意味のズレという問題はほぼ解消されることになる。

とはいえ、マルクスの死後、最も多くの人々によって読まれてきたドイツ語版『資本論』は、Erbeutung を Ausbeutung に直したエンゲルス版であったのであり、この事実は動かしえないものである。仮にこのような改変措置に何らかのミスがあったとしても、そのことを前提にして搾取概念の考察を進めるわけにはいかない。というのは、日本において「搾取」理解の前提になってきたのはエンゲルス版の『資本論』だったからである。しかも、ここには本稿の主題にとって重要な次のような疑問が残る。すなわち、エンゲルス編集の英語版『資本論』第1巻は、ドイツ語第3版を底本として翻訳されたはずなのに、なぜこの英語版でも当該箇所が exploitation ではなく obtain と訳されているのだろうか、というのがそれである。節を改めてこの問題を立ち入って検討することにしたいが、その前に、本節で提出された疑問を整理しておこう。

第1の疑問は、Ausbeutung と Exploitation との間に意味のズレはあるのか、というものである。第2の疑問は、問題箇所の Erbeutung がなぜ第3版以降 Ausbeutung に置き換えられたのか、というものである。この疑問は同時に、かかる置き換え措置は、マルクスの指示によるものなのか、エンゲルスの判断によるものなのか、あるいは単なる誤植なのか、という疑問を惹起する。第3の疑問は、なぜ英語版の訳者は Ausbeutung を exploitation と訳さずに obtain と訳したのか、というものである。この疑問は、問題箇所のような文脈の中で「剰余価値の Exploitation」という表現が、語学的かつ理論的に許されるのか否か、という疑問に言い換えられる。そしてこの疑問は、日本語訳『資本論』の「剰余価値の搾取」という翻訳は正しいのか、という問題と同一の問題でもある。本稿の以下の諸節では、Exploitation 概念の理解にとって重要な、この第3の疑問を究明する。これ以外の疑問点については、別稿において改めて取り組みたい。

## 2. Exploitation と「搾取」

上で見たように、たいていの場合 Ausbeutung を exploitation と訳す英語版の訳者も、「剰余価値の Ausbeutung」という語句については exploitation を用いずに obtain を用いている。それゆえ、英語版の『資本論』を底本として邦訳版を作るとすれば、例文3)の当該箇所は「剰余価値の獲得」という表現になるであろう。実際、英語版『資本論』を底本とするトルコ語訳『資本論』では、当該箇所には「獲得」を意味する elde edilmesi が用いられており、exploitation に対応する sömürü は用いられていない<sup>11</sup>。ラシャトル版『資本論』を底本とする邦訳の『フランス語版資本論』でも、当該箇所は「剰余価値を獲得する」と訳されている<sup>12</sup>。これに対してドイツ語原本を底本とする日本語版では、この箇所はどの版でも先に掲げたように「剰余価値の搾取」と訳されている。「剰余価値の獲得」と「剰余価値の搾取」とでは、読者に著しく異なった印象を与える。どちらが適切な翻訳なのであろうか。この問題には、言葉の意味の問題と、『資本論』の Exploitation 理論をどう理解するかという2つの問題が含まれている。まず、言葉の意味の問題について考えてみよう。

英語としての exploitation も、ドイツ語としての Exploitation も、その源はフランス語の ex-

ploitation である。しかも、前節でも触れたように、マルクスはこの語をフランス語として意識して用いている。それでは、フランス語の exploitation はどのような性格を持つ言葉なのであるうか。

フランス語の exploitation は、日本語の「搾取」とはかなり異なった語源的意味内容を持っている。この語は、古典ラテン語の explicare を語源とする exploiter の名詞形である<sup>13</sup>。explicare は、接頭辞 ex「外へ」が plicare「折り畳む」に付いた語であることから、「開く」「解く」「ひろげる」「のばす」といった意味を持つ<sup>14</sup>。ここから、フランス語の exploitation は、まず開発、経営、開発された場所を意味し、さらに比喩的な用法として、利用、活用、悪用という意味を与えられている<sup>15</sup>。一方、日本語の「搾取」は『搾(しば)り取(と)る』を音読して生じた和製漢語<sup>16</sup>であると考えられている。つまり、語源的には exploitation が、何かを「開発利用」することであるのに対し、「搾取」は何かを「搾り取る」ことである。exploitation と「搾取」との間には、このように、語源的な意味において大きな相違があるのである。そして、ここで特に留意すべき点は、exploitation を用いる話者と「搾取」を用いる話者との間に、しばしば視点の違いが生じるということである。話者が exploitation と言うとき、彼の視点は利用の対象と利用行為そのものに当てられている。一方、話者が「搾取」と言うとき、しばしば彼の視点は搾り取られたところの成果(例えば油や汁など)の方に当てられる。日本語には「労働者を搾取する」という表現と並んで「労働者から搾取する」という表現もあるが、後者の場合、話者の視点は、省略されている剰余価値にも当てられている。「労働者から剰余価値を搾取する」という言い方が、日本語としては最も安定する表現である<sup>17</sup>。

さて、このような語源的相違を踏まえた上で、例文 3) に出てくる「剰余価値の Ausbeutung」の訳し方を考えてみると、文脈上、Ausbeutung を exploitation とは訳し得ないことが分かる。というのは exploitation の中心的な意味は「開発利用」であるが<sup>18</sup>、「剰余価値の開発利用」ということになると、それは当該引用文の文脈には適合しない別の意味、例えば資本蓄積のような意味を持ってしまうからである<sup>19</sup>。それ故、「剰余価値の Ausbeutung」を「剰余価値の obtain」としたのは、文脈上、妥当な処置であるといえる。一方、「剰余価値の搾取」という日本語版の翻訳は、この「搾取」を語源的な意味で、すなわち「搾り取る」という意味で用いれば、文脈上、全く適切な翻訳であるといえる。しかし、ここですぐに想起しなければならないのは、「剰余価値の搾取」という場合の「搾取」は、現行版『資本論』第1巻第7章でマルクスが「労働力の搾取度」という場合の「搾取」とは異なるという点である。「労働力の搾取」においては「搾取」は Exploitation の訳語であり、したがってフランス語の exploitation と置き換え可能な用語として機能している。これに対して、「剰余価値の Ausbeutung」における「搾取」は exploitation とは置き換え不可である。「搾取」という同一の日本語が用いられているとはいえ、前者は「搾取(開発利用)」であるのに対して、後者は「搾取(搾り取り)」である。「用いる」と「取る」は異なった行為を指示する別々の語であり、これらは明確に区別されなければならない



い。それゆえ、例文 3) の「剰余価値の Ausbeutung」は、「労働力の Exploitation」に用いられる訳語とは異なった日本語に訳されるべきである。「労働力の Exploitation」を「労働力の搾取」と訳すのならば、「剰余価値の Ausbeutung」の方は、英語版のように「剰余価値の獲得」と翻訳した方が良かったと思われる。

次に、この翻訳を、『資本論』の Exploitation 論理解との関連で考えてみよう。周知のように、『資本論』では、Exploitation という用語が次のような仕方で導入されている。

「剰余価値の可変資本にたいする比は剰余労働の必要労働にたいする比と等しい。すなわち、剰余価値率  $\frac{m}{v} = \frac{\text{剰余労働}}{\text{必要労働}}$  である。両方の比率は、同じ関係を相異なる形態で表現するのであって、一方は対象化された労働の形態で、他方は流動的な労働の形態で、表現する。それゆえ、剰余価値率は、資本による労働力の、または資本家による労働者の、搾取度の正確な表現である。」(委員会訳、第 1 巻、370 頁)

ここから、次のような整理が可能である<sup>20</sup>。

- ①剰余価値率 = 剰余価値/可変資本 …… 対象化された労働、すなわち価値に着目した指標
- ②労働力搾取度 = 剰余労働/必要労働 …… 流動的な労働、すなわち労働時間に着目した指標

上記において Exploitation という用語が用いられているのは②の方である。②が着目するのは、「流動的な労働」すなわち「運動中の労働」であり、その大きさは時間で計られる。Exploitation の度合いは、必要労働に対して、どれだけ長い時間にわたって剰余労働をさせることができるかによって計られるのである。剰余労働をさせることは、購入した労働力を利用することであるから、②に Exploitation が用いられていることは、先に見たこの用語の語源的な意味とも正確に対応しているといえる。

一方、剰余価値は①に属する概念であり、剰余労働が対象化されたものである。つまり、論理的な前後関係としては、剰余労働 → 剰余価値、であって、労働力の Exploitation の結果として獲得されるものが剰余価値なのである。こうした前後関係は、例えば、次のような文章の中に明確に表現されている。

#### 例文 4)

「彼が地代として土地所有者に引き渡すものは、いまではもはや、彼により、彼の資本の力によって、農業労働者たちにたいする直接の搾取 (Exploitation) を通じてしほり出された (extrahierten) この剰余価値の一超過部分にすぎない。」(委員会訳、第 3 巻、1402 頁。MEW, Bd. 25, S. 808.)

このように、まず労働者の Exploitation があり、これを通じてしほり出された (extrahierten) ものが剰余価値である。剰余価値の源泉が問題となる文脈では、Exploitation の対象は労働力または労働者であって、剰余価値ではないのである。それゆえ「剰余価値の Exploitation」という表現は、理論的に混乱した用語の組合せであり、『資本論』の中には見られないものである。日本語版『資本論』の中に「剰余価値の Ausbeutung」の訳として一箇所だけ現れる「剰余価値の搾取」という語句は、このような理論的混乱を惹起する可能性が高い故に不適當な翻訳である。や

はり、英語版のように「剰余価値の Ausbeutung」を「剰余価値の獲得」と訳するのが適切である。

しかしながら、「剰余価値の搾取」という語句は、日本のマルクス経済学関連の文献の中で目にする機会の多いものである。日本語訳『資本論』全3巻の中に1箇所だけしか存在せず、しかも不適當な翻訳であるこの表現が、あたかも剰余価値論を代表する語句であるかのように、広く普及している。これはなぜであろうか。恐らくその理由の1つは、われわれが「搾取」という用語を用いる際、その語源的意味に影響され、それに引きずられてしまうからであろう。先に見たように、「搾取」は「搾り取る」から作られた和製漢語である。そのせいか、「搾取」という日本語は「搾り取る」という本来の日本語のイメージを強く発している。そして、「搾り取る」の目的語は油や乳のような物質であるか、または金品とされるのが普通である。これに対応して「搾取」の目的語も、日常的な用法においては、金品とされることが多い。例えば、辞書に見られる次のような用例がそうである。

「彼らのへそくりまで搾取する<sup>21)</sup>」

「仲買人が手数料を搾取する<sup>22)</sup>」

このため、「搾取」という用語を日本語の日常的用法に即して使用すると、「搾取」の対象として最もふさわしいのは、対象化された労働であるところの剰余価値になる。日本語としては、邦訳版『資本論』に頻出する「労働力を搾取する」という言い方よりも、「労働者から剰余価値を搾取する」という言い方が落ち着きやすい。邦訳版『資本論』を読んでいる時には「労働力の搾取」という語句を目にしていなくても、『資本論』を閉じて日本語で考え始めると、われわれの頭の中では日本語の力が作動して、いつのまにか「労働力の搾取」が「剰余価値の搾取」に置き換わってしまうものと推測される。かくしてわれわれは、「剰余価値の搾取」という語句を『資本論』の概説書等でしばしば目にすることになる。しかし、「剰余価値の搾取」は「剰余価値の獲得」と「労働力の搾取」とを混同した語句であり、用語の不適當な組合せである。この語句の不適當性は、これに「率」や「度」と付けてみるとより明瞭になる。「剰余価値率」と「労働力の搾取度」は、専門用語によって定義された専門用語であるから、さすがに両者を混同した「剰余価値の搾取度」という表現は、一般向けの解説書の中にも見られないのである。

さて、以上のような事情を勘案すれば、そもそも Exploitation に対して「搾取」という日本語を対応させたことに無理があったといわざるをえない。節を改めて Exploitation の邦訳語の問題を考えてみたい。

### 3. Exploitation の適切な邦訳語はどれか

Exploitation の邦訳語を「搾取」とすることについては、次のような訳し分けの必要性の問題もある。

例文 5)

“aus seinem Kapital den gewöhnlichen Profit durch Exploitation der Bodenart A herauszuschlagen” (Werke, Bd. 25, S. 759)

「土地種類 A の利用によって自分の資本から通常の利潤をしほり出すこと」(委員会訳, 第 3 巻, 1315 頁)

#### 例文 6)

「どちらの形態においても, 土地——共同の永遠の所有としての, 交替する人間諸世代の連鎖の譲ることのできない生存および再生産の条件としての土地——の自覚的, 合理的な取り扱いの代わりに, 地力の搾取 (Exploitation) と浪費が現われる (この搾取 (Exploitation) が, 社会的発展の到達水準に依存しないで, 個々の生産者たちの偶然的で不均等な事情に依存するということは別として)。小所有においては, このことは, 労働の社会的生産力を使用するための諸手段と科学とが欠けていることから起こる。大所有においては, 借地農場経営者たちと所有者たちとのできるだけ急速な致富のためにこれらの手段が利用 (Exploitation) されることによって」(委員会訳, 第 3 巻, 1424-1425 頁。MEW, Bd. 25, S. 820 f.)

このように、『資本論』には, 労働力の Exploitation だけでなく, 土地や地力や諸手段の Exploitation という表現が出てくる。その際, 邦訳では, 土地については Exploitation を「利用」, 地力については「搾取」, 手段については「利用」と訳し分けている。いうまでもないことであろうが, フランス語版や英語版では Exploitation の訳語には必ず exploitation が用いられており, 原語を異なった訳語に訳し分ける必要はない。もちろん, 日本語は, ドイツ語, 英語, フランス語といった印欧語族とは系統を異にする言語であるから, 日本語の中に Exploitation と一致する言葉がないことはやむをえないといわざるをえない。とはいえ, Exploitation が『資本論』のキーワードの 1 つであることを勘案すれば, 本来これには一個同一の訳語があてられることが望ましい。では, どのような処理が考えられるであろうか。

「搾取」が Exploitation と Ausbeutung の主要な訳語として定着する以前の時代には, Exploitation の訳語として「駆使」や「虐使」が使用されていた時期がある<sup>23</sup>。「駆使」と「虐使」には, 「取」ではなく「使」という文字が用いられているため, こちらの方が「搾取」よりも Exploitation の語源的意味に近いように思われる。特に, 「駆使」は事物や技術や能力を「使いこなす」ことだけでなく, 人を「追い立てて使う」という意味も持っているため, Exploitation の訳語としては悪くないものである。しかしこの言葉には, 先の例文 6) のように, 浪費と並列されて用いられる場合に必要でネガティブなニュアンスが欠けている。この語には, 他者に何らかの害が生じる仕方で他者を利用する, という意味合いが弱い。一方, 「虐使」の方は, 「虐」という文字のインパクトが逆に強烈過ぎるだけでなく, 生物以外のものには使えないという欠点がある。より適切な訳語がないであろうか。

従来の翻訳の中では, 『資本論』第 1 巻の機械論の中に現れる次の訳文が, 1 つの手掛りを提供しているように思われる。



## 例文 7)

“Ausbeutung des Arbeiters durch die Maschine ist ihm also identisch mit Ausbeutung der Maschine durch den Arbeiter.” (MEW, Bd. 23, S. 465)

“L'exploitation du travailleur par la machine c'est la même chose que l'exploitation des machines par le travailleur” (MEGA, II. Abt., Bd. 7, S. 380)

「機械による労働者の搾取は、彼にとっては、労働者による機械の搾取〔利用〕と同じである。」(委員会訳、第1巻、761頁)

先に見たように、Ausbeutung と Exploitation には意味的に重なっていない部分が存在する可能性があることを否定できない。しかし、例文 7) では、明らかに Ausbeutung が Exploitation と同一の意味で用いられている。というのは、例文 7) のドイツ語文は、フランス語ラシャトル版からドイツ語第3版に移し入れられた部分であるからであり、この Ausbeutung の原語はフランス語の exploitation であるからである。つまり、このドイツ語文は、ドイツ語初版と第2版には存在しないものであって、マルクスがラシャトル版にフランス語で書き加えたものなのである。それゆえ、「労働者の Exploitation」を「労働者の搾取」と訳す日本語版翻訳者が、「労働者の Ausbeutung」をも「労働者の搾取」と訳すのは全く妥当であるといえる。しかしその一方で、「機械の Ausbeutung」については、これを「機械の搾取〔利用〕」と訳している。この「搾取〔利用〕」という訳語は『資本論』全体の中でもここだけに登場する。恐らく訳者としては、例文 6) の中で「手段が Exploitation される」を「手段が利用される」と訳したように、ここでも単に「機械の利用」と訳したかったのではないかと思われる。実際、大月書店全集版『資本論』や岩波文庫版『資本論』では、この部分が「機械の利用」と訳されている<sup>24</sup>。また、『フランス語版資本論』でも、「労働者の exploitation」には「搾取」が、「機械の exploitation」には「利用」が用いられている<sup>25</sup>。しかしこの文章の中で、一方を「労働者の搾取」と訳し、他方を「機械の利用」と訳してしまったのでは、この文章に込めたマルクスの修辭的意図を無にしまうことになる。そこで新日本版の邦訳者は、「搾取〔利用〕」といういささか苦しい訳語を選択することになったと思われる<sup>26</sup>。しかし、一方を「機械の搾取〔利用〕」としたのであれば、もう一方についても「労働者の搾取〔利用〕」とすべきではなかったであろうか。というのは、こうしてこそ、マルクスの修辭法が邦訳文の中に完全に再現されることになるからであり、そして、そもそも「〔利用〕」という補足語を必要としているのは「労働力の搾取」の方だからである。

前節で確認したように、Exploitation の中核的意味は「開発利用」である。しかし、日本語の「搾取」には「利用」という意味合いが極めて薄くしか備わっていない。このため、剰余価値の生産を論じる文脈で「剰余価値の搾取」という表現が用いられることにもなる。しかし、仮に Exploitation の訳語が当初から「搾取〔利用〕」であったとすれば、先の例文 3) の問題箇所は「剰余価値の搾取〔利用〕」ではなく、「剰余価値の獲得」に類する翻訳になっていたであろうと思われる。というのは、「剰余価値の搾取〔利用〕」という語句は、「〔利用〕」という補足語の存在

によって、問題箇所においては文脈上不適当な訳語として意識されたであろうからである。この点で、「労働力の Exploitation」を「労働力の搾取〔利用〕」と翻訳するのは、これを単に「労働力の搾取」とするよりも良い翻訳であるといえる。また、これは、「労働力の Exploitation」を「労働力の利用」と訳すよりも良い翻訳である。というのは、単なる「利用」では、利用される者に何らかの害が生じるという Exploitation が持つところのニュアンスが伝わらないからである。さらに、「労働力の開発利用」という翻訳も、現時点では排除されるのが妥当である。というのは、現在の日本では「開発」という語が連想させるのは、多くの場合 développement や development や Entwicklung であって、exploitation ではないからである。このように考えると、「搾取〔利用〕」という訳語は、日本語として未完成であるとはいえ、それほど悪い訳語でもないように思われる。

「搾取」という日本語は、Ausbeutung と Exploitation の訳語として最適なものではない、といわなければならない。とはいえこの訳語は、日本では 100 年に近い歴史を持っており、この言葉に関連した先人の営為は尊重されるべきものである。また、今からこれを全く別な日本語に置き換えることも困難である。だとすれば、すでに邦訳版『資本論』で用いられている「搾取〔利用〕」あるいは「搾取利用」を、Ausbeutung と Exploitation の訳語として広く用いるようにするというのも、1つの解決法ではないかと思われる。

#### 4. 「剰余価値の搾取」が問題となる一事例

前節では、Exploitation の邦訳語について 1つの提案を行った。もちろん、提案者自身も上記のような処置が最善のものであるとは思っていない。しかし、Exploitation の訳語について何らかの処置が講じられなければ、「剰余価値の搾取」という表現が再生産され続けることは確かであり、そしてそれは望ましいこととは言えないと思われる。そこで最後に、「剰余価値の搾取」という語句が論述上問題となる 1つの事例について検討を加えておくことにしたい。

松井暁「マルクスと正義」(2007 年)<sup>27</sup>は、日本におけるマルクス派規範理論の到達点であり、大きな影響力を持つ労作である。同論文で提出されている新説は示唆に富むものであって、文中で行われる諸学説の評価も高い説得力を持っている。しかしながら、細部における次のような叙述には同意し得ない部分がある。

「マルクスは剰余価値の搾取を『盗み』と呼んでおり、盗みは不正であることを含意するから、資本主義社会における分配を不正と考えていたはずである。<sup>28</sup>」

この文は、「マルクスと正義をめぐる論争」<sup>29</sup>において N. ジェラスが行った論争整理の一部を松井が要約したものである。ここで要約されている見解はジェラス自身の見解でもあるとされるものであり、松井によって「妥当である」と結論された「搾取 (exploitation)」理解である。しかし、マルクスは本当に「剰余価値の搾取 (exploitation)」を「盗み」と呼んだのであろうか。

先に見たように、マルクスの『資本論』では「剰余価値の Exploitation」という表現は用いら

れていない。ドイツ語第3版以降の『資本論』第1巻に1箇所だけ現れる「剰余価値の Ausbeutung」は、文脈上の意味としては「剰余価値の獲得」であり、英訳版では「剰余価値の obtain」と訳されている。したがって、英訳版『資本論』には「剰余価値の exploitation」という語句はない。マルクスは「剰余価値の exploitation」という語句を使用していないのである。マルクスが「剰余価値の exploitation」という語句を使用しなかったとすれば、これを「盗み」と呼ぶこともあり得ないと言わなければならない。

しかしながら、『資本論』では「剰余価値の exploitation」という語句が用いられていないとしても、ジェラスがこの語句を論理的に導出し、これを自身の論文で使用していたのかもしれない。もしそうであるとすれば、「マルクスは剰余価値の搾取を『盗み』と呼んだ」という文にも理論的な意味があることになる。それでは、実際のところはどうかであらうか。

ジェラスは、当該論文の中で「剰余価値の exploitation」という語句を一度も使用していない。‘capitalist exploitation’のような exploitation の対象を伴わない表現を別とすれば、彼が使用しているのは、‘their exploitation’<sup>30</sup> と ‘exploiting them’<sup>31</sup> であるが、この場合の their と them は workers のことであり、surplus-value ではない。これ以外では『資本論』からの引用である ‘the exploitation and the squandering of the powers of the earth’<sup>32</sup> が当該論文に見られるだけである。また、剰余価値については、彼が使用しているのは ‘the appropriation of surplus-value’ であって ‘the exploitation of surplus-value’ という表現はどこにもない。このように、ジェラスも「剰余価値の exploitation」という語句を用いていないのであるから、「マルクスは剰余価値の搾取を『盗み』と呼んだ」という文は、誤った言明であるように思われる。

しかしながら、この文が日本語で書かれたことを勘案すれば、この文の意味内容としては、さらに次の2つのケースが考えられる。

第1のケースは、「剰余価値の搾取」という場合の「搾取」が exploitation ではなく appropriation であった、というものである。ジェラスは、当該論文の中で次のように述べている。

‘he often talks of the capitalist’s appropriation of surplus-value in terms of “robbery”, “theft” and the like’<sup>33</sup>

この文の中の appropriation の訳語として「搾取」を用いれば、この文全体は「マルクスは剰余価値の搾取を『盗み』と呼んだ」と翻訳されうる。先に見たように、邦訳版『資本論』では、フランス語訳や英訳が「獲得」と訳すところを「搾取」と訳しているので、ここで ‘the appropriation of surplus-value’ が「剰余価値の搾取」と訳されたとしても、それほど不思議ではない。しかも、日本語としての「搾取」には、無理に取り上げる、むしり取る、横取りする、といった連想が付随するから、「剰余価値」と「盗み」とを繋ぐ言葉としては「搾取」は適任である。とはいえ、appropriation と exploitation は異なる2つの概念である。労働力の exploitation は、労働力を必要労働時間を超えて利用することであり、労働者に剰余労働をさせることである。この剰余労働が実体的基礎となり、ここから剰余価値が形成される。この形成された剰余価値を資本家

が appropriation するのである。つまり論理的前後関係としては、「労働力の exploitation」→ 剰余価値 → 「剰余価値の appropriation」なのであるから、exploitation と appropriation とは明確に区別されなければならない。それゆえ、exploitation と appropriation の両方に「搾取」という訳語をあてる「マルクスは剰余価値の搾取を『盗み』と呼んだ」という文は、このケースにおいてもやはり不適當であるといわざるをえない。

第 2 のケースは次のようなものである。すなわち、本来「労働力の搾取」と記すべきところを、うっかり「剰余価値の搾取」と記してしまった、というのがそれである。本稿の第 2 節で述べたように、日本語で思考する我々には、常にこの危険がつきまとう。松井論文もその例外ではなかったかもしれない。仮にこの推測が正しいとすれば、問題の文は「マルクスは労働力の搾取を『盗み』と呼んだ」に変換されるはずである。それでは、この文は正しい言明であるといえるであろうか。

マルクスは、『資本論』の中で、確かに「労働力の搾取 (exploitation)」を「盗み」と呼んでいる。松井論文では、『経済学批判要綱』の一節が証拠として引用されているが、ここではマルクスが繰り返し校閲して出版した『資本論』第 1 巻を使用したい。その中で、マルクスが明らかに「盗み」と見なせる語句を用いている箇所としては、次のようなものがある。

「おれの労働力の利用とその掠奪とは、まったく異なる事柄である。……お前は……おれの商品の価値の 3 分の 2 を毎日おれから盗む (stiehlt) のである。お前は 3 日分の労働力を消費しながら、1 日分の労働力をおれに支払うのだ。それは、われわれの契約に反し、商品交換の法則に反する。だからおれは、標準的な長さの労働日を要求するのであり、……」(長谷部訳, 194 頁<sup>34</sup>, MEW, Bd. 23, S. 248)

「資本が労働者たちの食事時間や休息時間をかように『少しずつ盗むこと (kleinen Diebstähle)』を、」(同上, 201 頁, MEW, Bd. 23, S. 257)

「このばあいには、剰余労働は、その正常的限界をのりこえることによってのみ延長されるのであり、その領分は、必要労働時間の領分の一部分を横領すること (usurpatorischen Abbruch) によってのみ拡大されるであろう。」(同上, 256 頁, MEW, Bd. 23, S. 333)

「不況時代でさえも、工場主たちによっては、過度な賃銀引下げ、すなわち労働者の必要生活手段の直接的盗奪 (direkten Diebstahl) によって、法外な利潤をえるために利用される。」(同上, 363 頁, MEW, Bd. 23, S. 477)

「労働者の必要な消費元本の直接的盗奪 (direkte Raub)」(同上, 476 頁, MEW, Bd. 23, S. 629)

これらの文章には 1 つの共通点がある。それは、労働者の生活水準が切り下げられるということ、労働者の寿命が縮減されるということである。これは、労働力の搾取度の増大が労働力の価値を実現しないことによって行われるケースである。この場合、資本家は労働者に対して、その労働力の価値に等しい金額を支払っていない。資本家と労働者との間の交換は不等価交換であり、商品交換の法則に反する。したがって、このケースでは、労働力搾取度の増大は「盗み」で

ある，ということになる。つまり，「マルクスは労働力の搾取を『盗み』と呼んだ」という命題は正しいのである。

ただし，上記の引用文は，現実の資本主義の描写である。マルクスは，現実の資本主義においては労働力の価値以下への労賃の引き下げが横行すると述べているから，資本主義的分配を不正だと見なしていたのは確かである。しかし，ジェラスや松井が主張する正義論は，等価交換が行われる理論的な資本主義を前提としており，そのような資本主義においても資本家は労働者に対して「盗み」を働くというものである。本稿の筆者としては，現実の資本主義を前提とした正義論にも捨てがたい魅力を感じるが，本稿の課題はジェラスや松井の正義説の可否を検討することではないので，この点には立ち入らないでおきたい。

さて，松井論文の中の「剰余価値の搾取」という語句が，「剰余価値の exploitation」の意味で使用されたのか，「剰余価値の appropriation」の意味で使用されたのか，あるいは「労働力の exploitation」の意味で使用されたのか，実際のところは不明であるが，いずれにしてもこの語句が用いられない方が良かったことだけは確かである。日本のマルクス経済学で好まれてきた「剰余価値の搾取」という語句は，この種の論述で使用された場合，論証の障害となってしまうのである。

## おわりに

「剰余価値の搾取」という語句は，邦訳版『資本論』全3巻中1箇所だけにしか出現しないものであり，フランス語ラシャトル版『資本論』を底本とした邦訳『フランス語版資本論』には一切現れないものである。この語句中の「搾取」に対応する原語は Ausbeutung であるが，これは，エンゲルスが編集した『資本論』第1巻のドイツ語第3版以降に出現するものであり，マルクス自身が刊行した『資本論』第1巻の初版と第2版では，Ausbeutung の位置に置かれていた単語は Erbeutung であった。これらの単語を，第2版を底本としたフランス語版が obtenir と訳したのは当然であるとしても，第3版を底本とした英語版も obtain と訳しており，意味としてはどちらも「剰余価値の獲得」となる。本稿では Exploitation という用語に関する語源学のおよび理論的検討を行い，次のような結論を得た。すなわち，第3版以降の「剰余価値の搾取 (Ausbeutung)」という表現においても，その場合の「搾取」は「労働力の搾取 (Exploitation) 度」という場合の「搾取」とは異なっており，文脈上その意味は「獲得」となる，ということである。つまり，当該箇所は本来「剰余価値の獲得」と訳されるべきであったのである。また，従来用いられてきた訳語の中では，Exploitation の訳語としては「搾取〔利用〕」が最も適切ではないか，ということにも言及した。

(付記) 本稿の第1節と第2節は，2009年3月22日に立教大学経済学部で行われたシンポジウム「新MEGAの編集の成果とデジタル編集の課題」での報告を基にしている。記して関係各位に謝意を表したい。



## 注

- 1 Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie, Erster Band, Buch I: Der Produktionsprozeß des Kapitals*, Marx-Engels Werke, Bd. 23, Dietz Verlag Berlin 1962, S. 232. 引用文中の下線は引用者による。以下同様。
- 2 マルクス『資本論』第 1 巻, 資本論翻訳委員会訳, 上製版, 新日本出版社, 1997 年, 370 ページ。以下, 本文では「委員会訳」と表記。
- 3 マルクス『賃銀・価格および利潤』長谷部文雄訳, 岩波文庫, 1981 年, 87-88 ページ。Karl Marx, Friedrich Engels, *Werke, Artikel, Entwürfe September 1864 bis September 1867*, Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe (MEGA), I. Abt., Bd. 20, Dietz Verlag Berlin 1992, S. 175. なお, ここで MEGA と記されているのは, いわゆる新 MEGA のことである。以下同様。
- 4 Karl Marx, *Le capital: Paris, 1872-1875/Karl Marx*, Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe (MEGA), II. Abt., Bd. 7, Dietz Verlag Berlin 1989.
- 5 例えば, 'Aber zur Ausbeutung dieser Gesetze für Telegraphie usw.' (MEW, Bd. 23, S. 407 f.) という部分は 'Mais leur application à la télégraphie, etc.' (MEGA, II. Abt., Bd. 7, S. 331.) となっている。
- 6 Karl Marx, *Capital, a critical analysis of capitalist production: London 1887 / Karl Marx*, Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe (MEGA), II. Abt., Bd. 9, Dietz Verlag Berlin 1990, S. 353 f.
- 7 Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie: 1. Bd., Hamburg 1872 / Karl Marx*, Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe (MEGA), II. Abt., Bd. 6, Dietz Verlag Berlin 1987, S. 394.
- 8 Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie: 1. Bd., Hamburg 1867*, Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe (MEGA), II. Abt., Bd. 5, Dietz Verlag Berlin 1983, S. 332.
- 9 Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie: 1. Bd., Hamburg 1883 / Karl Marx*, Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe (MEGA), II. Abt., Bd. 8, Dietz Verlag Berlin 1989, S. 395.
- 10 Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie: 1. Bd., Hamburg 1890 / Karl Marx*, Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe (MEGA), II. Abt., Bd. 10, Dietz Verlag Berlin 1991, S. 365.
- 11 Karl Marx, *Kapital, Birinci Cilt*, Çeviren Alaattin Bilgi, Altıncı Baskı, Sol Yayınları, Ankara 2000, s. 389.
- 12 カール・マルクス『フランス語版資本論下巻』江夏美千穂／上杉聰彦訳, 法政大学出版局, 1979 年, 37 ページ。
- 13 小学館ロベール仏和大辞典編集委員会編集『小学館ロベール仏和大辞典』小学館, 1988 年, 993-994 ページ, 参照。
- 14 國原吉之助『古典ラテン語辞典』大学書林, 2005 年, 250, 261, 559-560 ページ参照。
- 15 伊吹武彦外編『仏和大辞典』白水社, 1981 年, 1021 ページ, *Trésor de la langue française: dictionnaire de la langue du XIXe et du XXe siècle (1789-1960)*, tome huitième, Éditions du centre national de la recherche scientifique, 1980, pp. 482-485. 参照。
- 16 『日本国語大辞典 第二版 第五巻』小学館, 2001 年, 1433 ページ。
- 17 「労働者から剰余価値を直接搾取する当事者は生産に投資する資本家です」不破哲三『マルクスは生きている』平凡社新書, 2009 年, 84 ページ。
- 18 邦訳版『経済学批判要綱』の次の一節は, 疑問を差し挟む余地のない翻訳である。「資本にもとづく生産は, ……自然および人間の諸属性の全般的な開発利用 [Exploitation] の一体系, 全般的な有用性の一体系をつくりだすのである」マルクス『資本論草稿集②』資本論草稿集翻訳委員会訳, 大月書店, 1993 年, 17 ページ。しかし, 'Exploitation der Arbeitskraft' を「労働力の開発利用」と訳すことについては, 本稿第 3 節で述べたような問題がある。
- 19 例えば, フランス語の exploiter は『資本論』第 1 巻の「剰余価値の資本への転化」における次のような文の中で使用されている。'Peu nous importe aussi pour le moment que les capitaux additionnels s'ajoutent comme incréments au capital primitif ou s'en séparent et fonctionnent indépendamment, qu'ils soient exploités par le même individu qui les a accumulés, ou transférés par lui à d'autres mains.' (MEGA,

II. Abt., Bd. 7, S. 505.)

- 20 柴田信也編著『政治経済学の原理と展開』創風社，2001年，40ページ，参照。
- 21 『日本国語大辞典 第八巻』小学館，1974年，674ページ。
- 22 『類語大辞典』柴田武・山田進編，講談社，2002年，723ページ。
- 23 『日本国語大辞典 第二版 第五巻』小学館，2001年，1433ページ，および，玉岡敦「日本における『共産党宣言』の翻訳と，訳語の変遷—1904年から1925年まで—」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第49号，マルクス・エンゲルス研究者の会，2008年6月，51-61ページ，参照。
- 24 『マルクス＝エンゲルス全集第23巻』大月書店，1965年，578ページ。マルクス『資本論（二）』エンゲルス編，向坂逸郎訳，岩波文庫，1969年，439ページ。一方，高畠素之訳『資本論』（カール・マルクス『資本論第1巻第1冊』改造社，1927年，426ページ）では当該箇所が「彼れの目には，機械に依る労働者からの搾取といふ事と，労働者に依る機械からの搾取といふ事との間には区別がなくなり」と訳されている。
- 25 前掲『フランス語版資本論下巻』1979年，79ページ。
- 26 長谷部文雄訳『資本論』（マルクス『資本論1・第一部全』エンゲルス編，世界の大思想18，河出書房，1964年，354ページ）でも同様の処理がなされている。
- 27 松井暁「マルクスと正義」『専修経済学論集』第42巻第2号（通巻98号），専修大学経済学会，2007年12月，33-89ページ。
- 28 同上，40ページ。
- 29 Norman Geras, The Controversy About Marx and Justice, *New Left Review*, Number 150, March/April 1985, pp. 47-85.
- 30 Ibid., p. 52.
- 31 Ibid., p. 55.
- 32 Ibid., p. 78.
- 33 Ibid., p. 56.
- 34 前掲，長谷部文雄訳『資本論』1964年，194ページ。引用文中の……は引用者による省略部分。